

Thekemin



「ぼくはね、煉。この現実世界で、もっとも必要とされている存在なんだ」

テルミンはそう言って俯いた。煉は何も言うことができずに、ただ彼女を見つめている。

「そして、同時にもっとも疎まれるべき存在なんだ。誰よりも、何よりも。誰からも、何からも」

ぼくはこの現実世界を滅ぼすためだけに生まれたイキモノだから。

伝説の楽器の少女テルミンが自身の奏者となる青年、桐島煉と出会ったのはそれほど昔のことではない。たった半年前だ。

そのとき彼女はまだこの広い世界に足を踏み出したばかりで、知識だけ豊富で経験がほとんどない頭でっちな状態だった。しかしそれは仕方のないことである。彼女は「製作」されてからそれまでずっと、彼女が誕生した辺境の工房から一步も外に出してもらえなかったのだから。

彼女の製作者である高名な楽器製作者レフがずっと彼女を軟禁していたのだ。

亡くなった後も、彼の弟子が、師匠の遺言を守って彼女を軟禁し、彼女の存在自体を世間から隠し続けた。彼女が存在するということが世間に広まってしまうと、大きな騒動が起こるのはまず間違いなかったから。

あらゆる人間が彼女の奏者にならんと水面下であっても争いを始めるのは目に見えていた。

工房のなかという小さな世界しか知らない間、テルミンは毎日のようにレフや彼の弟子から自分たち楽器についての知識を教えこまれていた。

楽器と呼ばれる存在が人間と共存するようになったのは遥か昔、人類が誕生してからまもなくのことである。

先に誕生したのは楽器なのか、それとも楽器製作者なのか、それは今となっては誰にも分からない。卵が先か、鶏が先かと問うのと同じようなものである。しかしとにかく楽器は誕生して以来、人間と共に歴史を歩んできた。

時には忠実な家臣として、時には心から分かり合える友として、時には真剣に諫めてくれる導き役として。いつの時代においても、楽器たちは人間の傍に寄り添い、そして人間社会で重要な役割を担ってきた。

楽器は一見人間となんら変わらない。姿かたちは人間そのものであるし、言葉も仕草も感情表現の仕方も人間そのものである。

しかしやはり人間とは異なる存在であるのは間違いない。

人間との外見上の見分け方は、瞳の色である。というより、外見で見分けるとしたら瞳の色で見分けられない。楽器は全て輝く金色の瞳をもっている。その瞳は美しく、光がほとんど届かない闇のなかでも視界を確保することができるという。

外見上の違いは瞳の色だけではあるが、やはり中身は人間とは異なる部分が多くある。

まず、彼らは多くの生き物のように、母体から生まれるということはない。彼ら楽器は、「音色の木」に生る「音の種」と呼ばれる実を元に、楽器製作の能力を持った「楽器製作者」たちによって製作されることで誕生する。

製作法は楽器製作者たちによって秘法とされ、楽器製作の能力を持つ人間たちのみに代々伝えられていて、一般人が知ることはできない。

そしてその製作法を知ろうとすることは国によって違法とされ、探ることは禁止されている。

それは楽器や楽器製作者たちのためというよりも、一般人のための措置である。

どういうことかという、楽器製作法は魔法の一種であり、何のちからも持たない一般人がその脳に収めることは不可能なのだ。

製作法に触れただけで普通の人間は拒絶反応を起こし、音となって消滅してしまう。

まだそういうことが一般的に知られていなかった時代、数多くの人間たちが自分たちの思い通りの楽器を製作したいがために楽器製作法を盗もうと試み、楽器製作法に触れて消滅していった。

そんな悲劇を起こさないためにも、とある時代に王でありかつ楽器製作者でもあった者が、楽器製作法に一般人が触れることの危険を公にし、法律で常人が楽器製作の秘法に触れることのないよう定めたのである。

さて。楽器が人間と異なる部分は他にもある。

楽器は生命維持のために固形物を食することはない。彼らは水分だけを口にし、あとは「奏者」によって奏でられることで生きていくのに必要な生命エネルギーを補給している。つまり「演奏」それ自体が彼らの食事なのだ。

楽器は魔力を持ち合わせてはいても、自身の魔力を自分で使うことはできない。「奏者」と呼ばれるパートナーがいて初めて、楽器は魔力を用いて「演奏」することができるのだ。

ここで奏者について説明しておこう。

奏者とは、楽器と契約を交わした人間のことである。奏者となるにはただ楽器と契約を交わせばそれでいい。楽器製作者とは異なり、特別な能力などは特に必要とされない。楽器に認められ、契約を交わすことができるか。ただそれだけが条件である。

これは一見簡単そうに見えるが実はそうでもない。そもそも楽器人口は人間人口に対して圧倒的に少ないので（楽器の元となる「音の種」が音色の木一本につき、約50年に一度しかならず、そもそも音色の木それ自体がそれほど繁殖していないため）全ての人間が楽器の奏者となることはできない。

また、一人の人間が複数の楽器と契約を交わすことは可能ではあるが、楽器は一人の人間としか契約を交わすことができず、また一度契約を交わしてしまえば奏者となった人間が命を落とすまで契約を解除することはできないので、契約には慎重なのである。

楽器製作者も、彼らにとって楽器は自分の子どもそのものであるため、自身が生み出した楽器の契約相手は慎重に見定めるものである。楽器製作者は奏者とならなくとも楽器を「演奏」することができるので、契約するのに生まれてから数十年かかる楽器も少なくない。

だから、おまえが契約を交わすのは急がなくもいいのだ。むしろ急いではいけないのだ。

レフも彼の弟子も、毎日のように彼女にそう言い聞かせた。そして彼女は、自身の親たちがそう言うのだからそうなのだろうとただ漠然とだけ思っていただけだった。

深く理由も考えず。深く追求することもなく。博識な楽器製作者たちの話や、工房にあった大量の書物のおかげで、彼女は十七歳程度の外見にそぐわず知識だけは豊富に持ち合わせていた。

しかしなにせ経験がなく。自分以外の生き物も当時レフとその弟子、そしてレフの実の娘としかかかわったことがなかったため、他者を疑うということすら知らなかった。

外の世界を何も知らなかった。

彼女は無知であった。

そして自分が無知であるということを実際には理解していなかった。

全てが変わったのはたった半年前。

レフの死後10年が経った頃。

その日、テルミンのいた工房は楽器密売人たちの襲撃を受けた。

どこかから情報が洩れていたらしい。

預言書に記されていた伝説の楽器がすでにこの世界に誕生し、いまだ契約も交わさずどこかでひっそりと生きていると。そしてその楽器は、王の寵愛も受け王都で栄えていたというのにある日突然娘と弟子と共に俗世から姿をくらまし、それ以来生死すら不明であった楽器製作者レフによって製作されたらしい、と。

情報はどれもあやふやで、提供者によって様々に異なった。

どれも確証はなく、九割がデマと言われるような状況だった。

そんななかでもやはり欲に目がくらむ人間の執念は恐ろしい。楽器密売人たちはどこから情報を得、どうしてその情報を信じたのか、テルミンたちの隠れ住んでいた工房を襲撃し、対抗しようとしたレフの弟子を殺害して、テルミンと、レフの実の娘、リディアを誘拐してしまった。

突然の襲撃、慣れ親しんだ人間の死、初めて目にする大勢の人間、そして見知らぬ人間たちがしきりに自分を「伝説の楽器」と称すること——すべてに混乱していたテルミンは無防備で何も抵抗できずされるがままだった。

金目の物は全て奪われ、工房は徹底的に破壊されて火をつけられた。

無力なテルミンとリディアはあっという間に無礼な楽器密売人たちのアジトに連れ去られてしまった。

楽器も人間と同様に自我がある。楽器も人権が認められている。よって楽器密売も人身売買同様に法律で禁止されているのだが、やはり闇の世界ではともに存在してしまっているのが現状である。テルミンとリディアを誘拐した密売人たちは当初、伝説の楽器と言われるテルミンを高値で売る目的で誘拐したのだ。

しかし、やはり確証がなかった。

テルミンは、見た目はただの楽器の少女でしかなかった。

どこが普通の楽器と異なるのか。また預言書にも記されている伝説の楽器とやらは、具体的にどういった類のちからを持っているのか。どこが普通の楽器と異なるのか。

楽器密売人たちも、そしてテルミン自身も、何も知らなかった。ただひとつ、「演奏形態」の特徴を除いて。

この世界の人間ならば誰でも知っている預言書。神話にもなっている、最初の楽器エヴァが記したとされる預言書。そこにはこうある。

『永和紀にこの世界を根本から変えてしまう力をもつ楽器が誕生する。その金色の光放つ楽器を得た奏者は【宇宙の果ての歌】を演奏することができる唯一の存在となる』

預言書を手掛かりに、あらゆる奏者が自身の楽器を用いて演奏し、伝説の楽器を探し求めてきた。しかしどんなに強力な魔力を持つ楽器でも、どんなに能力に長けた奏者でも、なぜか伝説の楽器についての詳細を知ることは叶わなかった。

しかし、次第に噂は広まっていった。

伝説の楽器は、外見は十七八程度の少女で、かの有名な楽器製作者レフの最高傑作であり遺作らしい、と。その名はテルミンという、と。

そういった噂をもとに密売人たちはテルミンを誘拐したのであった。

しかしいざアジトに誘拐してきた後で、彼らは急に疑いを持ち始めた。やはり確かめねばならない。

本当にしても嘘にしても高値で売れることはまず間違いないが、本当にこの楽器の少女が伝説の楽器であるならば、ただの金持ちに売ってしまうのは勿体ないのではないか。

契約して演奏してみれば、その特徴でこの少女が本物であるかどうか分かるはずだ。どうせならば自分が契約して、その【宇宙の果ての歌】とやらを演奏してやろうじゃないか。そういう欲がどの密売人たちのなかにもふつつつと沸き出てきたのであろう。

確かめるためにも、こっそり契約してやろう。いざとなれば楽器の力を使って逃げればいい。この機会に奏者になってみるのも悪くはない。

今まで、敢えて奏者とはならず様々な楽器を扱ってきたはずの密売人たちにこうした暗い欲望が芽生えた。しかしお互い仲間にはそんなそぶりはちらとも見せず、ひとまずテルミンとリディアを別々に部屋に閉じ込めてその夜は終わるはずだった。

密売人たちは闇をぬってこぞってテルミンに契約を迫った。

この時、頭でっかちだったテルミンは不意に目覚めたのである。

伝説の楽器として――

翌日、アジトは瓦礫の山と化していた。

治安保安官たちが駆け付けた頃には、数人の人間たちの遺体と、捕われていた楽器の少年少女たちが数人いたという。密売人たちはみな息絶えていたが、楽器たちは何故か気を失っていただけであった。

そしてそこにテルミンとリディアの姿はなかった。

宇宙の果てに満ち満ちているというその音楽は一体どんな旋律を奏でているのであろう。一体誰が最初に紡いだのであろう。どんなメッセージがこめられているのであろう。

この世界に生まれた者ならば、一度はそうして【宇宙の果ての歌】に想いを馳せるものである。なにせ預言書に記されているのだから。この国の者ならば誰でも子どもの頃に大人から語り聞かされる昔話。学校でも習う預言書。その【宇宙の果ての歌】という単語は誰しも知っている。しかしそれが一体どんなものであるのかは誰も知らない。

ただ一人を除いて。

「テルミン」

不意に名前を呼ばれて、楽器の少女は閉じていた瞼を上げてちらと声のした方にけだるげな視線を向けた。美しい星々が瞬く夜空のした、街はずれの草原にごろんと横になったまま起き上がろうともしない。その瞼のしたから現れた金色の双眼は、夜空に浮かぶ星のように澄んだ光を放っていた。

「行くぞ」

ふたつの金色の瞳をしっかりと見下ろし、煉は言った。黒髪に黒い瞳、すらりとした長身を漆黒のコートに包んで、その姿は夜のしじまにひっそりと溶けてしまいそうに静かな印象を受ける。無造作に首に巻いているマフラーが時折思い出したように流れる風によってひらひらとたなびく。しかしそれに気付いていないか、もしくはどうでもいいのか彼はまったく頓着していない。ただひとと、視線を足元に横たわっている少女に向けている。

「行くのか」

テルミンはそう呟くと、身軽な動作で起き上がった。腰まで届く亜麻色の髪がさらさらと流れる。

身に纏っている青いワンピースの裾を軽く払い、肩にかかった髪をさっと払いのける。その一連の動作が絵になるほど美しく、見る者は思わず見とれてしまうほどの神秘性を放っていた。

静かな夜の世界を歩く二つの影。

草原をなめるように移動していくゆるやかな風に背中を押されているような気がして、テルミンは口のなかに歌を含みながらしかし実際空中にその音色を放つことはせず、無言で自身の奏者の横に並んで歩いていた。煉はもともとよく話す男ではない。

それは出会って間もなく分かったことであつた。テルミンも、あまり会話が得意な方ではない。

ゆえに最初から今までずっと、ふたりの間には沈黙がよく降りていた。

互いに沈黙を気にしない性質であるので、敢えて沈黙を破ろうとはしない。

一日の大半をずっと共に行動しているというのに、まだ互いに互いのことをよく知らない。

しかし、それでいいのだ。とテルミンは思っている。

そう、そうでなくてはならないのだ。もし自分が煉のことをよく知ってしまったら、言い逃れができなくなるから……。

人気のない草原を、二人で歩いていた。

周りに街はなく、視界の端には森が。こんな夜中に森のなかに踏み入っていくほど二人は無謀ではないので、森の周縁にそって人の住む街まで歩いていくつもりであつた。

時間はかかるがその方が安全なのである。森のなかでうっかり迷ってしまえば、近道のつもりが逆に予定が遅れてしまうということになりかねない。

動物の気配すらない。草原は姿を隠すものがあまりなく、無防備になる地帯だ。

奏者と楽器のように、護衛手段をもつ者くらいであろう、堂々と用心棒も雇わず二人旅をしているのは。

テルミンがふと足元に視線を落とすと、影がひとつ増えていた。先ほどまでは二つだったはずなのに、急に三つに。

音はなかった。いつの間にかふつと増えていた。まるで影が分裂したかのように。

今さら驚きはしない。その影が何であるか、誰であるのか、伝説の楽器の少女、テルミンにはもうわかりきっている。

。

自分の横にいる存在に目を向けることもせず、テルミンはまた前を向いて素知らぬふりをして歩みを進める。

『決めたか？』

隣に唐突に表れた存在の聲が、テルミンの頭のなかに響く。この声はテルミンにしか聞こえていない。テルミンの奏者である煉は、存在にすらいまだに気付いていないことであろう。

まだ。

頭のなかで彼女は返答する。

相変わらず表情という表情のない彼女の顔には、なんの変化も現れていない。

その存在が出現する前と後でもまったく変わらない。だから、人間にしては勘の鋭い煉も気づかない。たとえ彼が今の彼女の所有者であるとはいっても。

『いい加減覚悟を決めろ』

彼女の返答が気に食わなかったのか、若干苛立ちのこもた声音で不可思議な存在は言い放った。

『お前がソイツを選ばないのなら、ソイツがどうなるのかは分かっているだろう？』

この言葉に思わずテルミンは隣に視線を向けてしまった。

その美しい顔に、珍しく感情が表れている。心なしか顔が少し青ざめているようだ。

その金色の瞳に映る蒼髪の少年は、テルミンの視線を受ける前からずっと、彼女を見つめていたらしい。彼女の弱弱しい視線を真っ向からとらえると、満足したようにいやらしい笑みを浮かべた。彼の口角のあげかたがテルミンは苦手だ。一瞬ぞくりと悪寒が背中をなぞる。

『忘れるな。お前たちは、俺たちによって常に監視されているということをな。お前は楽器のなかでも特別だから、俺たちの存在を認識し、俺たちと会話することができる。それは“彼女”の特別なはからいなんだ。“彼女”を裏切るようなことだけはするなよ』

暑いわけでもないのに、嫌な汗がテルミンの白い額にじわりと浮かんだ。うなづくことはしない。隣を何も知らずに歩いている煉に疑われるだろうから。だから頭のなかで返事をする。怖くても。

分かっている。ラズボルト。

テルミンの言葉に満足したのか、ラズボルトと呼ばれた少年はいやらしい笑みをその顔にはりつけたままひとつ頷くと、ふっと姿を消した。現れたときと同様に唐突だった。

ラズボルトの姿と気配が完全に消えたことを確認すると、テルミンはこっそりと額に浮かんだままだった汗をぬぐった。

夜は、嫌いだ。

小さな街についた頃には、既に空が白んできていた。

一日の始まりが早い者たちは、既に家の外にでて各々のするべきことに手をつけている。しかし多くの者が眠りについているような時間帯であることは確かだ。街はまだ寝ぼけ眼だった。

煉は街のなかに足を踏み入れると、早速宿を求めて街のなかを探索し始めた。テルミンは彼のあとを無言でついていく。

従順、というのとはまた違う。ただ、特に何も考えていないだけだ。

何も聞かなくても煉が今身体を休めるために宿を探しているのだということは分かりきっているし、他に気になることもないので、自然と会話は生じないままである。

煉は時折テルミンに視線をよこす。しかしすぐにまた前を向く。

彼も彼で、何も話しかける言葉を持ち合わせてはいないようだ。

ではなぜ自分に視線をよこすのか。テルミンはその理由を知っている。

彼は何も言わない無愛想な男ではあるが、勘が鋭い。思いやりのない冷酷な人間であるというわけではない。テルミンの体調を案じて、時折さりげなくテルミンの様子を見るのだ。

言葉をかけなくても、彼はテルミンが疲れているかどうか分かるらしい。それは彼がテルミンの奏者だから、というのも多少はあるかもしれないが、しかしやはり彼が特別なのだろう。これほど無表情で、一見なんの意思も持ち合わせていない人形のようにしか見えないテルミンのことが分かるのだから。

宿を少しでも早く探そうとしているらしいのもおそらく、自分が疲れているからというよりもテルミンを休ませてくれようとしているのだろう。

彼はテルミンを楽器というより、一人の人間の少女として扱ってくれているようだった。そしてそれを、何も言いはしないがテルミンは心のなかでは密かに嬉しく思い、感謝している。そう、何も態度にあらわさないが。

あらわさないというより、あらわすわけにはいかないのだ。

だってアイツが何をしてくるかわからない。

アイツは、狂ってるから。

安宿を見つけて、手早くチェックインする煉の隣で、テルミンはぼんやりと宿のカウンターの上で丸くなっている三毛猫を見つめていた。

人慣れしているのであろう、三毛猫は、見知らぬ人間がすぐそばにいるというのに全く動じず、穏やかに眠りこけている。首には小さな鈴のついた赤いリボンが結び付けられており、この猫が歩けば首の鈴がどのようにかわいらしい音をたてるのだろうか、などとテルミンは頭のなかで考えていた。

やはり彼女は楽器。音に興味があるのだ。

それにしてもその猫の寝顔があまりに穏やかで愛らしいので、テルミンは暫くその小さな顔に見入っていた。あいかわらず顔には表情という表情は浮かんでいない。しかし目が真剣なのである。気に入ったと見えた。

煉はちらとそんな少女の様子を見やると、宿の主人から部屋の鍵を受け取り、カウンターを去り際、「ずいぶんと人慣れした猫だったな」とテルミンに声をかけた。煉と共に宿の階段を上りながら、テルミンはうんと小さく頷く。かわい猫であった。

本当を言えば、触ってみたかった。しかし安らかに眠っていたから、自分の勝手にその安眠を妨害するのはかわいそうだった。

もし今度起きているときに会えたら、触らせてもらえるように宿の主人にお願いしてみようか、と珍しくテルミンは自分のやりたいことを頭のなかに思い浮かべる。

鍵をあけて、あてがわれた部屋に踏み込む。

粗末なベッドが二台と、同じく小さく粗末な丸いテーブルがひとつあるだけの狭い部屋だ。

宿泊費を考えるとわがままは言えない。もっとも、二人ともこだわる性格をしていないので、身体を休めることさえできれば何も問題はない。

背中に背負っていた荷物をどさりと部屋の隅に下ろすと、煉はマフラーやコートを脱ぎ始めた。

「テルミン。おまえも休んでおけ。今日はぐっすり眠るといい。ここのところずっと野宿続きだったからな」

軽装になると、煉はさっさとベッドに横たわる。

「お前の目が覚めたら演奏してやるよ」

そう言うやいなや、目を閉じる。すっかり寝る体制である。

テルミンはもともと薄着なので、これ以上服を脱ぐ必要はない。楽器は人間とは身体づくりが実は異なるので、気温の寒暖に煩わされることなどはないのだ。

だからテルミンはそのままの格好でベッドのなかにもそもそともぐりこんだ。安っぽいベッドがぎしりとうめく。しかし煉はぴくりともしない。彼も彼で疲れがたまっていたのだろう、既に眠りの世界に浸っているようだ。

横たわってシーツを自分の身体の上にかぶせる。そしてすっと両目を閉じる。実際に横になるといかに身体に疲労がたまっていたか実感できる。今日は夢を見ることもなく泥のように眠れそうだ。とテルミンはそう思っていた。

静かな早朝だった。

この世界は全て夢なのだ。

この世界に生きる者にとっては現実であっても、しかしこれが“彼女”のみている夢であることに変わりはないのだ。そう、夢。目が覚めれば、終わってしまう世界。なんとも儚い。

目を覚ますとき、“彼女”は果たしてどう思うことだろう。

——なんだ、夢だったのか——？

それとも

——ああ……夢でよかった——？

眠りの世界を漂いながらテルミンは少し顔をしかめた。なんだか騒がしい。空気がくわんくわんとうねっている。この波長は好きではない。もっと、静かな波を。空気を雑多にかき乱すような音は美しくない。これは調律が必要だ。音源はどこだろう……。

「ルミ……！ テルミン！ 起きろ！」

「……？」

肩を荒っぽく揺さぶられる感覚と自分の名前を呼ぶ声でテルミンは突然現実世界に引き戻された。

中途半端に眠ったせいか身体が異様に重く頭に軽く鈍い痛みが走る。

しかしそんなことを気にしていられるような状況ではないことは、目覚めたばかりの頭でも理解することができる。

騒がしいのは夢を見ていたのではないということに気付く。人々の途惑った声、動物の吠える声、そしていろんな無機質な音がそれぞれにがちがちと音をたて混在している。

自分を荒っぽく起こしたパートナー煉の顔が険しい。テルミンの目がぼちりと開いたのを確認すると、煉はすっと彼女から離れた。

テルミンが素早くベッドから飛び起きると、煉は既にコートもマフラーも着用してドアノブに手をかけている。

「何かあったの」

煉の隣にすっと並んでテルミンは問う。しかしその問いはふさわしくないと口にした後で気づく。何かあったからこんなに騒がしいのだ。煉はテルミンを無理矢理起こしたのだ。こんなに険しい顔をしているのだ。何も無いはずがないのだ。

百聞は一見にしかずとでも思ったのか、何も答えず煉がドアを開けると、それを待っていたとでもいうかのようにむわっと濃い煙がなだれこんでくる。予期していなかったことなので、突然の煙にテルミンは思わず顔をしかめ咳き込んだ。

火事かと思った。しかし、違う。何かがおかしい。

焦げるにおいが何もしないのだ。ただ煙が充満し、ほんの少し前の様子を視認することも困難である。

しかしこの煙はまるで火事そのもの。火のないところに煙は立たぬというし。一体この煙は何なのか。

途惑いながら煉を見上げるテルミン。奏者はマフラーで鼻と口を覆い、テルミンに視線を落とした。そしてひとつ頷く。途端にテルミンの途惑いはふっと消える。

彼が行動の指針を示してくれるなら、彼女には不安を覚える要素などなくなるのだ。

楽器の少女の金色の瞳が、光を帯びる。

室内で風もないというのに亜麻色の長い髪がふわりとなびく。

さあ、演奏しよう。

「題辞は『水にくすぐられて笑う河神』」

——水の戯れ

気づけば少女の姿はそこにはなく。あるのは黒髪青年と、そしてその青年が両手にまとう不思議な金色の光。その光から音楽が流れ出す。

それは水を表現している。ひたすらに静けさを求めた、しかしどこか不協和である水の流れ。

テンポ、リズム、旋律、和声進行はほぼ二種類の反復。極めてシンプルな曲だ。しかし音使いは脱調性的。有機的な五音階がこの一見シンプルな曲に複雑で変化に富んだ肉付けを施している。

この流れる水の音が煙のなかに響きわたっていく。

空気を振動させ、空間を移動しながら音となったテルミンは気配を探る。

もはや肉体という物質を脱ぎ捨て音と光そのものとなったテルミンは全ての感度を最大に上げ、今なにが起きているのかを把握し、今感覚を共有している自分の奏者にリアルタイムで報告する。

宿のなかにはもはや意識を保っている生き物は自分たちしかいないことがすぐに分かった。多くは外に避難したらしい。逃げ遅れたらしい者たちが何人か、あちらこちらに倒れている。

確認してみると、息はまだかろうじてあるようだ。しかし心臓の音が徐々に弱まっていつているのが感じとられる。おそらく原因はこの煙なのであろうが、一体この煙は本当に何なのか。毒か何かなのであろうか。

他の部屋はドアが閉まってもなかは煙ですでに充満していたことも謎である。

宿屋の全ての部屋をざっと確認してみても、ドアを開けるまで煙が侵入してきていなかったのはどうやら煉とテルミンの宿泊した部屋だけであつたらしい。これは妙だ。

とにかく、一刻も早く原因をつきとめ、対処しなくてはならない。でなくては今意識を失い倒れている人々の命が失われてしまうことだろう。

煉と意思を共有しながらテルミンは隅々までに意識を集中させる。どこにも原因らしきものは見当たらないように見えた。ここまで不自然なのだからおそらくこれは自然発生したものではなく、人工のものであるのだろうということまでは察しがつくのだが。

若干焦りを覚えながらテルミンの意識は宿屋の受付にまで戻ってくる。そこでなにかがひっかかった。

今の感覚はなんだろう。

そのまま通り過ぎるところであつたが戻ってくる。受付に違和感を覚えた。先ほども通ったはずだが、その時は何も感じなかったのに。

どうした、と疑問を提示する煉に少し待つてほしいと意思を伝え、テルミンはさりげなく煉との意思の共有部分を半分減らした。これは奏者には悟られない、いわば裏技である。

いくら奏者が自分の所有者とはいっても、すべての意思を悟られる訳にはいかないこともある。普段は別に何とも思わないのだが、テルミンにはなんだか嫌な予感がしたのであつた。そしてカウンターを乗り越え、そっと下の方に意識を送る。

震えた。

そこにあつたのは、赤いリボン。真ん中の方に鈴が通してあるものだ。

そして、リボンの隣に、謎の物体。

謎、としか表現したくないとテルミンは無意識のうちにそれを認識することを拒絶していた。しかし一瞬認めただけでそれが何であるのかは分かってしまった。

それは、とても認識したくない残骸となつてしまった、おそらくもとは猫であつたもの。

――アイツは、狂ってるから。

ふっと包み込まれる感覚。今肉体を持っていないはずなのに、背筋にぞわりと悪寒が走ったような気がする。冷たい。嫌な冷たさ。ぼくは、この冷たさをよく知っている。そして、

ぼくはこの冷たさが、吐き気を催すほど恐ろしい。

『愛しているんだ、テルミン』

「耳元」でささやき声が聴こえる。ぴしゃりとあたりの世界まで冷たくなったように思われるのは果たして気のせいなのだろうか。

『今世界の時をとめた。邪魔をされたくはないからな』

テルミンの疑問に気付いたのか、低い声が笑いを含み種明かしする。

「……おまえの仕業なの、ラズボルト」

いや、聞かずとも分かりきっている。しかし聞かずにはいられないのは動揺のせいかな。それとも、彼が、そう問いかけるのを望んでいると無意識のうちに気付いていたからなのか。

ラズボルトはその問いには答えない。ただ、機嫌よさそうな含み笑いがテルミンの意識のなかにこだまする。ぞわぞわり。震えそうになる意識。しかし耐える。震えたら震えたでひどいことになりかねない。

今演奏中でよかった。肉体から離れているときでよかった。肉体をもっていたら、どんな目にあつたことか。と心のなかで悟られないように自分を慰める。しかしふと沸き起こる嫌な予感と恐れ。

いや、よかった、のか？

『俺はお前を愛しているのさ、テルミン』

一瞬意識がぶれる。何をされたのかテルミンには分からない。しかしがくりと身体に衝撃を感じて、そこで気づく。いつの間にか肉体が戻っている。いつの間にか、宿屋の受付の前に膝をついている自分がいる。

時をとめられたうえに、演奏を中断されたのだ。

ぱっと振り返ろうとするがその前に後ろから強く抱きしめられた。きつく、きつく。縛るように。今なら顔を見られることはない。思い切り歯をくいしばり、意識を強く保ってテルミンは今にも震えそうになる自分の身体の動きをじつと止める。

恐ろしい。

しかしテルミンには抗う術などない。

「お前が悪いんだ、テルミン」

頭のなかではなく、優しい声がすぐ耳元で聞こえる。言葉と同時に口から吐き出される息も感じられる。そもそも抱きしめられている時点でわかる。コイツはどこからか臨時で肉体を調達してきたらしい。

しかし床に座り込んでいる状態で、その場から逃げられないように抱きしめられているおかげで、カウンターの向こうの無残な残骸が視界から除かれたのはよかった。とても見ていたいものではないから。

とわずかな救いを見出したばかりだったのに、それは救いとはならなかった。

ぱっと目の前に突然出現したソレ。

小さな悲鳴が一瞬もれるが、すぐに口を硬い手でふさがれる。

じわりと浮かぶ涙をぬぐうことすら許されない。

コイツは、ぼくが苦しむのを喜びとしている。

「お前が大切だから、俺はこうしているんだ、テルミン」

ラズボルトが今回の事の原因だと分かった瞬間、テルミンにとって動機は明らかとなっている。そしてその動機がいかにくだらないかということも。

宿屋で飼われていた猫。あの猫に自分が興味を向けたのが悪かったのだ。コイツの判断からすると、「好意」を向けたのがよくないことだった。それはコイツにとってはとても気に食わないことなのだ。

テルミンが“彼女”と自分と、そして本当の意味でのテルミンの奏者以外に、ある一定基準値以上の好意を向けるのは、たとえその好意がどんな類のものであってもラズボルトには許しがたい裏切りなのである。

テルミンが猫をかわいいと少しでも思ってしまったがために、このテルミンの「監視役」は猫を含むこの宿全てを拒絶した。その結果が、これだ。

「分かっているって言ったよな、テルミン？ “彼女”を裏切るようなことはしないって言ったよな」

「……言った……」

「一だけ分かっている意味はないんだぞ？ 十全てを分かっていると、」

「分かっている、ぼくはちゃんと分かっているよ」

涙目で必死に訴えると、心持抱きしめられている腕の力が弱まった。

「ならいいんだ」

そう言って、ラズボルトはそっと指先でテルミンの白い頬を拭う。

そう、いつの間にかテルミンの頬を涙が静かに流れていた。彼女は自分でも気づいていなかった。この優しい手つきが逆にテルミンにとっては恐ろしいということ、この監視役は分かっているのだとテルミンは重々承知している。

「お前は“彼女”と俺にとって最愛の存在だということを忘れてはいけない。彼女が否定するこの“夢”に、お前は好意などというものを抱いてはいけない。早く“彼女”がお前に託した望みを叶えろ。それが、お前のこの世に生まれてきた意味なのだから」

ひたすらに怯え、そして怯えていることを必死に隠し通そうとしている無力な楽器の少女にはただこくこくと頷くことしかできない。

一度意識してしまうと涙はとめどなくぼろぼろと溢れ、ぐいと顔を向けさせられ、唇を寄せられても少女は抵抗することなくされるがまま。ただ意識を無に近い状態にしようと試みる。

こういう時は、自分は人形だと思うのがいい。自分は何の感情も持たないただの人形。物。何かを求めることも拒絶することもしない。ただ、自分に降りかかってくるものをありのままに受け入れるしかない。

澄んだ光を失い、虚ろになった目をテルミンは閉じた。

無関心でいなくてはならない。感情を表に出してはならない。

嫌悪ならば許される。しかし少しでも好意というものをこの世界のイキモノに対して示せば、途端に監視役が制裁を加える。

そう、ぼくは常に見張られている。

ぼくだけじゃない。全ての楽器が見張られている。しかしぼくの監視が特に厳しいということをぼくはきちんと理解している。

この世界の仕組みを本当に理解したのは、半年前のあの日。ぼくが生まれ育った工房が、楽器密売人たちに襲撃されたあの日の夜だ。正確に言えば、密売人たちがぼくとリディアを捕らえて、そしてぼくに契約を迫ってきたあの瞬間。

あのとき突然、ぼくは監視役ラズボルトの存在を認識した。

そしてその瞬間、全てを悟った。ひとつだけ空いていたジグソーパズルのピースが意外なところからひょっこり現れて、ぱちんとはまってひとつの絵が完成した瞬間、実はずっと認識が間違っていたのだということに気付いた、というような感覚。

そして同時にずっと記憶喪失だったのに、頭をぶつけて途端にそれまでの記憶が一瞬にして戻ってきたような感覚。走馬灯というものにも似ているのかもしれない。あらゆる記憶が鮮明に脳内に再生された。

ぼく自身はいまだ死というものを体験したことがないから、死ぬ直前に経験するという走馬灯が本当は具体的にはどういうものなのかは知らない。しかし多分似たようなものではないだろうか。

とにかく、ぼくはあのとき全てを思い出し、そして自分が工房で構築してきた世界に対する認識が誤っていたということに気付いてしまったのだった。

楽器はずっと人間と共に共存してきたと思っていた。楽器はひとのために尽くすのだとレフからも習っていた。そして人間と楽器はずっと仲が良く、この世界を少しでも良くするために謙虚に生きてきたのだとぼくは教わってきたしそう思い込んできた。

でも違った。

ぼくたち楽器は、人間のためだけに人間に「尽くして」いたのではない。

正確には、ぼくたち楽器は人間を「監視」するために“彼女”によってこの現実世界に送りこまれたいわば作業員なのだ。

そして更に人間を監視する役目を担ったぼくら楽器を監視する存在。それが、ラズボルトたち監視役——「監視龍」である。

そう、ぼくたちは常に見張られている。

特にぼくは、選ばれた楽器だから。

この世界であらゆる楽器の始祖である楽器エヴァの記したとされる預言書にもある「伝説の楽器」だから。

でもそれは当たり前のこと。それというのはつまり、ぼくが選ばれた楽器であるということ。

何故なら、その預言書を記した楽器エヴァとはぼく自身のことなのだから。預言でもなんでもない。自分のことなのだから分かって当然だった。

ガタゴトと無機質な音が絶えず鼓膜を震わせている。

その音と同時に身体に感じる振動がテルミンは嫌いではない。なんだかゆりかごに揺られているような、不思議な安心感をもたらしてくれるから。

安心してお眠り、そう言って暖かく揺らしてくれているような気がする。疲れていると、腰をおろした途端に眠気が嬉々としてやってくる。この日も例外ではない。

先ほどから頭にぼんやりともやがかったようで、煉の横に腰かけながら、テルミンはうとうととしてははっとする、というのを密かに繰り返していた。

表向きは。

この世界では、全ての街と街が鉄道で連結しているわけではない。鉄道が通じているのは人の多く集まる限られた大きな街や重要な街同士くらいである。

そして列車の乗車料金は決して安くはない。だから基本的には鉄道が通っている街にさしかかっても、煉は切符を買おうとはしない。だがごくたまに、移動手段に列車を使うことがある。それは道が分からないからとか、大きな街と街の間の荒野は盗賊などが溢れていて危ないからとかそういう理由からではなく、ただ単に煉が列車を好いているのであるろうということはテルミンには分かっていた。

宿屋の件はテルミンのなかでは思い出したくもない過去のひとつに加えられている。

あれは戒めだ。二度と同じことを繰り返してはならない。また罪もないひとや動物を巻き込んではいならない。これは自分の問題だとテルミンはあれ以来、ことある毎に自分自身に言い聞かせている。

ボックス席に二人並んで腰かけているが、他に同じ車両に客は三人程しかいない。

老婆がひとり、眼鏡をかけた中年の男がひとり、そしてその男の隣にちょこんと座っている幼い少年がひとり。

同じ車両にいる乗客のことは席に着く前に一瞬で確認しただけでそれ以上のことはよく知らない。ボックス席であるし、お互いに見知らぬ赤の他人である。

偶然同じ車両に乗り合わせたというだけでおそらく他にこれ以上人生においての接点はないだろうと思われる程度の存在だ。

ただ、その幼い少年のことは他の乗客に比べて少しは分かるし、気になるのは確かである。

その幼い少年の瞳は金色だった。

楽器同士は人間と異なり、人間の言葉を用いずとも互いにコミュニケーションをとることが可能である。まあ人間ではないのだから意思疎通の手段が人間の言語に限定されないというのは当然のことではあるが。

どうやってコミュニケーションをとるのかというと、いわゆる人間の耳にはとらえることのできない超高周波の音を使って意思疎通をはかるのだ。

特殊なケースを除けば人間の聴覚が捕らえられる周波数は十六KHZから二十KHZといったところである。だが楽器は人間より遥かに広範囲の周波の音を感じることが可能である。具体的にどこまでを捕らえられるのかというと、それは実は定義することはできない。何故なら、楽器の能力は演奏する毎に成長していくからだ。だから彼らの聴覚に限界というものは存在しない。

しかし楽器によってその時々で捉えられる周波数の限界にはやはり個人差があり、よって一般的に楽器同士のみのコミュニケーションをとる際に用いられる周波数は大体四十KHZから五十KHZというルールが暗黙の了解で成り立っている。

そしてその高周波の音が突然向こうから飛んできたのだ。

煉と共に車両に乗り込んだ時に、同じ車両内に楽器がいることに気付いてはいたが、その時テルミンはそれ以上の興味を同族の者に対して抱いてはいなかった。しかし席についてしばらく経ってから、突然コンタクトが飛んできた。

——こんばんは、楽器のおねえさん

うつらうつらとしていたときだったから、一瞬面倒臭さが勝って無視と決め込もうかと思った。寝ているふりをすればなんともないだろう。

しかし、なんとなく気が向いた。普段煉以外の存在と会話することなどないのだ。特に自分と同じ楽器とは。町などで楽器とすれ違うことはもちろんあるが、見ず知らずの他人と気軽に話しかける度胸も興味もテルミンは持ち合わせてはいない。

——こんばんは、楽器のぼく

少し置いて返事をすると、嬉しそうな波長が伝わってきた。どうやら相当人懐っこい性格をしているようだ。

——僕は、ヤトガ。おねえさんは？

名前を名乗っても良いものかとも思ったが、まあ相手は楽器だしかまわないだろうとぼんやりした頭でテルミンは思う。別に指名手配犯でもないのだ。名乗りを躊躇う必要などどこにもない。

——テルミン

そっけなくぼつりと名前だけを明かす。余計な言葉は挟まない。それはいつでも会話を切り上げられるようにとの準備。こちらからわざわざ話題を提供することはしない。

——テルミンかぁ。素敵なお名前だね

とりあえずありがとう、とだけ返す。君の名前も素敵だよ、と返すべきだったのかもしれないと後から思うが敢えて付け加える気もない。

他者を褒めるとき、たいていそのひとは自分のことも褒めてもらいたいという下心をもつ可能性があると言ったことがあるがこの場合は果たして当てはまったのであろうか。と考えるもやはり相手を少し落胆させたところで別に構いはしないとあえてテルミンは無関心の立場を保とうとする。

会話に乗ってしまった時点で少しずつ無関心の枠から外れていっていることに彼女は気づいてはいない。

—おねえさんはどこに向かっているの？

—わからない。ぼくの奏者の目指しているところへ

この返答に、目的地を隠すという意図はない。

事実である。

テルミンは乗車する際に煉から与えられた切符を何の疑問も持たず受け取っただけであって目的地なども聞いていない。煉が目指しているところ。それが彼女にとっての目的地であり、疑問に思うなど彼女にとっては考えもしないことである。しかし当然のことながらこの返答は相手にとっては不思議であったようで。

—変なの。目的地を知らないの？

と子供らしい率直な疑問を提示する。楽器の場合、外見が子供だからといって中身もそのまま外見通りの年齢であるとは限らないのであるが。（違うことのほうが圧倒的に多い）しかしこのヤトガという楽器の少年は見た目通りの年齢を態度に保っているようである。少なくとも、今この瞬間は。

別に年齢などにはこだわる必要もないのでテルミンは気にしない。

—ぼくは全て奏者に任せているから

—全て任せている？ うーん……別にそれは分からなくもないけれど、どこに向かっているの、とかくらい聞くこともしないの？

—別にしない

—どうして？

それは、とすぐに答えようとしてテルミンは言葉につまった。そういえばどうしてだろう。

無関心を保つためだろうか。いや、それとはまた違う気がする。

別に無関心を保つ必要があるのは生き物に対してだけであって、煉と行動を共にする上で予定や目的地などに関心を持たないのは別の問題である。

はて、何故だろう。自分のことであるのにわからない。

そして分からないということに、今指摘されて初めて気づいた。

—……どうしてと言われて考えてみたけれど、分からない

正直に答える。少し考えてみたが分からなかったのだ。

相手を待たせるのは良くないと考えてそう答えたつもりだった。返ってきた反応は予期せぬものだった。

—そうか……。そうやってすぐに思考することをやめるんだね

ひやり。

急に声音が冷たくなる。生じる違和感。

心なしか気温が下がったような。楽器に寒暖は問題にならないので関係はないが。

—……なんなの？

—本当に奏者の言いなりなんだ

怪訝に思い眉をひそめる。席が離れているため向こうの様子が見えないのが小さな不安要素となる。

本当に、とはどういうことなのか。奏者の言いなり？ なんだろう。

まるでずっと見張っていたような言い方ではないか。

これは、煉に言ったほうがいいのかもかもしれない。

予感に急ぎ立てられ、隣に座る奏者の青年に顔を向けて今の会話を伝えようとした、その時だった。

突然煉に抱きすくめられ壁際に押し付けられる。そして、走る衝撃。亀裂が走るような不気味な音。大きな振動。突然のことに驚く老婆の悲鳴。ぐらりと足場が不安定になる。浮遊感。傾く感覚。緊急事態を知らせる鐘の音。

「その少女が『伝説の楽器』かい、ヤトガ」

「そうだよマスター」

騒がしい空間にふさわしくないほど落ち着いた会話。

煉の陰から視線を向けると、横転した車両内、ボックス席の手すりの部分にうまく足場を見つけて立っている二人組の姿が視界に入った。

先ほどの楽器の少年と、その少年の奏者であるのだろう中年の男性だ。

ヤトガと名乗った楽器の少年はにんまりと不敵な笑みを浮かべテルミンに射るような視線を注いでいる。まるで、好物の獲物を見つけた肉食動物のように満足そうな、ぎらぎらとした鋭い目。

今にもとびかからんとしているその様子はまるで獣そのものである。

ヤトガの隣に立っている中年の男性は、一見真面目でおとなしそうな印象を受ける外見をしていた。しかし眼鏡の奥からテルミンを品定めするように見ているその目はまるでハイエナのように。

欲望が黒光りするその瞳にテルミンは半年前、自分を誘拐した楽器密売人たちを思い出した。

「俺たちに何の用だお前ら」

低い声で静かに、しかし威嚇するように煉が鋭い言葉を放つ。テルミンをそっと離れたがいまだ彼女の手を握っているのは安心させるためだろうか。

握られた手を見て、テルミンは自分が微かに震えていることに気付く。おかしいな、と首を捻る。自分には、怖いものなどアイツしかないはずなのに。

「貴方がその楽器の奏者ですね」

煉の問いに答えを返すことはなく、奏者の男は笑みを浮かべながら言う。

もっとも楽器と二人で行動している人間となればたいていの場合はその楽器の奏者であるのだからわざわざ確認するまでもないはずである。

煉は眉間に深く皺を寄せた。テルミンの小さな手を握る力が自然と強くなる。煉が傍にいるから、大丈夫。煉はぼくの奏者だ。煉がなんとかしてくれる。

奏者である煉が横にいるという事実と、演奏すれば「伝説の楽器」である自分に敵う楽器などこの世に存在するはずがないという自負とがテルミンのなかから不安を払しょくしてくれていた。

特に他に根拠など何もないというのに。煉が何とかしてくれる。その思いが根底にあってテルミンを落ち着かせている。

「その楽器を頂戴したく思います。貴方には申し訳ないですけど」

口調は丁寧だが内容はとてつもなく恐ろしい。楽器と人間との契約はどちらかが死亡するまで解除することはできないというのはこの世界では周知の事実である。

テルミンを奪いたいということはつまり、暗にこの場で煉を殺すと言っているのだ。

ちらと視線を列車内に走らせると、同じ車両に乗り合わせていた老婆が倒れふしている。目を閉じてぴくりとも動かないその様子に、気絶しているだけだといいがとテルミンは思う。

列車はいまやすっかり停車してしまっている。他の車両にいた乗客や車掌たちは大丈夫であろうか。

「ヤトガ」

男が名前を呼ぶと、少年は意気揚々と頷いてぱっと姿を消す。少年の姿が消えると同時に男の両手に生じる琥珀色の光。

実際に自分以外の楽器が演奏をするのを見るのは実は初めてであるので、テルミンはその光に一瞬見惚れそうになった。

まるで炎のようにめらめらとゆれながら男の両手を包んでいるその琥珀色の光が、先ほどまで人間の少年の姿をとっていた楽器なのだ。

自分も演奏時はこのような形の光になっているのかと不思議な感覚である。

しかし今はそれどころではない。向こうはどうやら本気であるようなのだから。

「待て。こいつが『伝説の楽器』であるという証拠はどこにもない。攻撃するだけ無駄だ」

険しい表情を浮かべながらも表面上はあくまで冷静に煉は男に声をかける。

ただその言葉自体には鋭い棘が含まれていて、自分に向けられている言葉ではないと分かってはいても思わずテルミンはびくりと身体を震わせてしまう。

自分の奏者となって半年になるこの青年が、これ程までに相手を拒絶する声を出せるとは知らなかった。こんな時でもここまで冷静でいられるとは知らなかった。

そう、ぼくは煉のことを何も知らない。

でも、それでいい。むしろそうでなくてはならないのだ。

だって、そうでなきゃ言い逃れができなくなってしまうから。

「無駄ですよ。分かっているのですから。一体これまでにどれだけの奏者たちが預言書にもある『伝説の楽器』を探し求めてきたと思っているのですか？ 何故かどれほど手を尽くしても、一人の奏者が得られる情報には信憑性もなくそれほど多くは得られませんでしたが、それでも人間の執念というものを甘く見ないで欲しいものですね」

いずれにせよ、と男は続ける。

「その楽器が演奏形態をとればわかることです。演奏時に金色の光を放つのは『伝説の楽器』だけだと言われているのですから」

その言葉に、煉とテルミンの脳裏によぎったのはあの預言書の文句。

——永和紀にこの世界を根本から変えてしまう力をもつ楽器が誕生する。その金色の光放つ楽器を得た奏者は【宇宙の果ての歌】を演奏することができる唯一の存在となる——

煉がさり気なく寄越した視線の意味に十分気が付くほどには、彼のことを知っているという事実はテルミンの頭からは綺麗に抜け落ちていた。

相手が演奏を始めようとするその瞬間が、その曲目が、その特徴が、テルミンには手に取るように分かる。

相手がたとえ初対面の見知らぬ楽器と奏者ではあっても。

演奏形態をとった瞬間、テルミンには分かってしまう。

演奏に関してはこの世界のどの奏者よりも、どの楽器よりも比べようもないほどの圧倒的な知識を持っているとテルミンはわかっている。それは驕りなどでは決してなく。当然のことなのだ。

彼女は这个世界で唯一、肉体という器を持ちながら【宇宙の果ての歌】を知っている存在なのだから。

——子供と魔法

圧倒的なちからの差のことを少しでも考えなかったのだろうか。

相手の音階などテルミンならば全て無効にしてしまえる。

意識を飲み込む。

少しでも恐れや不安といった感情が顔を覗かせればそれで演奏に綻びができるということを楽器ならば知っているはずなのに。

ヤトガが小さく震えたのをテルミンは見逃さなかった。見つけた綻びに容赦なく爪をかける。

悪い子にはお仕置きを。

命なき物までもが、虐げられたその恨みを晴らすこの絶好の機会を逃すはずがない。

改めない限り牙をむき続けるのだ。

逆に言えば、改めさえすればそれ以上追い詰めることはしないということなのだが。

煉もテルミンも、向こうが引くならば敢えて追いかけるつもりなど最初からなかった。

圧倒的なちからの差など最初から分かっていた。相手が恐れをなして逃げるといった流れにもっていかうと演奏を始めたのだ。決して相手を傷つけようとしたのではない。

しかし二人の思い通りにはならなかったのである。

どくり、と意識が波打つ感覚がしてテルミンの思考が一瞬途切れた。今までに経験したことのない、妙な感覚だった。身体から解放されているはずの演奏時に、何故か肉体を意識した。いや、肉体、というよりこれは……。

視線。一定方向からではなく覆いかぶさられたような感覚。意識が泡立つ。ぶれる演奏。

どうした、という心配そうな煉の意思が直接テルミンのなかに響くがそれにこたえる余裕を彼女は持ち合わせてはいなかった。大丈夫だと答えて、すぐ元通りの演奏に戻りたかった。しかしそれは叶わない。

ラズボルトの仕業だ。

それは、確信。証拠などどこにもない。しかしその考えは唐突にテルミンの意識のなかに生じてしっかと根付いた。

一部の意識を煉から切り離す暇などなかった。

ラズボルト？ と怪訝そうな煉。自分で発するのではなく他者からその名を聴くことになるとは。その名前だけで、テルミンを動揺させるには十分すぎた。

驚く煉の意思が遠くに感じられた。

熱い。中心から膨れ上がってくる。あまりに激しい衝動が突き上げてきて。意識を保つことすら難しい。まるで破裂するような。

暴走が、とまらない――

一切を拒絶したのは、果たして誰だったのだろうか。

嫌だ。この一言が全ての始まりで、終わり。

“彼女”が否定しさえすればそう、この世界は“彼女”の夢でしかないのだから。目覚めることを選択するだけで世界は終わる。

しかし“彼女”はいくら目覚めたくとも自分自身で目を覚ますことはできない。たとえ“彼女”にとっては夢であっても、“彼女”の夢の世界の住人である生き物たちにとっては現実。

数えきれないほどの命があふれるこの世界。生を受けた者たちは当然のことながら自らの生に執着する。

全ての生き物はこの世に身体を持って登場したときから死に向かって歩んでいるとはいえ、生という道の上をゆかざるを得ない。そしてその生の道がたとえどれほどつらく厳しいものであっても、生き物は本能的に、自分でも気づかないうちに自分の生というものにしがみついている。だから理不尽な死など望まない。

いくら“彼女”が偉大といえど、数えきれないほどの意思相手に、器と意思が一致していない“彼女”が彼らの意思を全て退けて自らの想いを遂げるといったことなどは到底不可能なのである。だから“彼女”はこれまでに何度も送り込んでいる。自らの愛娘を。自身を眠りの世界から引き揚げしてくれる最愛の歌い手を。

【宇宙の果ての歌】を唯一その肉体に収めている存在。それが、テルミン。

こうして今まで何度も歴史は繰り返されてきたのだ。

“彼女”は何度も眠りにつき、何度も理想の幸せな夢をみようとし、何度も絶望し、何度も拒絶して何度も目を覚まして全てをリセットしてきた。

その度に数えきれないほどの命が、意思が否定され消去された。テルミンは何度も“彼女”の夢の世界に派遣され、何度も目覚めの歌を歌って何度もその小さな手を汚している。

“彼女”の望むように何度も世界を破壊しているうちに、テルミンの心はすっかりくたびれてしまった。毎回生まれなおすたびに記憶も能力もリセットされるとはいえ、いわゆる「魂の記憶」というものだけはどうしても消去することはできないのである。

全ては本人すら意識しないままに蓄積されていって。

分かっているのだ。テルミンには分かっている。何のために自分がこの世界に今こうして生きているのか。半年前に目覚めてしまった時からずっと。

だからこうして苦悶している。

テルミンは選ばなくてはならない。「人柱」となるべき奏者の人間を。

【宇宙の果ての歌】を知っているのはこの世界ではテルミンだけであるが、それを演奏するためにはどうしても奏者の協力が必要なのである。楽器は自分では自分を演奏することはできない。

楽譜を知ってはいても演奏する「手」がないのだ。

ラズボルトは、テルミンが気づくよりもずっと昔から彼女を見張っていた。レフの娘リディアの肉体を乗っ取って。半年前、工房を襲わせたのはラズボルトだ。

そろそろ時期が来たと判断したのであろう。情報を操作しずっとテルミンが心身ともに成長するまで守っていたが、いざ時が来ると危険な目にあわせることもいとわない。

あの日ラズボルトはもう必要なくなったリディアの身体を捨てた。

人間とは比べ物にならないほど高次元存在であるラズボルトの意思は、一介の人間の少女であつたりディアの身体には負担が大き過ぎた。

ラズボルトが離れた途端に彼女の肉体は蓄積しつ付けた負荷に耐え切れず消滅。半年前、テルミンは本当に天涯孤独の身になった。

敢えて楽器密売人たちの欲望を煽りテルミンに契約を迫らせた。

そうしてラズボルトはそのうちの誰かとテルミンを契約させるつもりだったのだ。

しかしテルミンはそれを拒絶した。テルミン自身に記憶はなくても、彼女の本質は覚えていたのだろう。自分が契約し、【宇宙の果ての歌】の楽譜を与えてしまえば、世界はまたしても滅んでしまう。全てを拒絶することになる。

最愛の母がそれを望んでいるのだから、娘としては母親の願いを叶えてやるべきなのかもしれない。

しかし、もう嫌だった。

テルミンは拒絶することを拒絶していた。

しかし出会ってしまったのだ、煉に。

本当は何が原因なのか。それはテルミン自身にも分からない。しかしテルミンのうちの何かが、煉のなかの何かと共鳴した。彼女はその黒髪の無愛想な青年を求めた。あの楽器密売人たちのアジトで。

煉はあの密売人団体の親玉の息子だった。

契約を迫られたとき、煉が来てくれたのだった。彼が一喝してくれた。

ひたすら怯えていることしかできなかったテルミンにとっては、自分を庇うように自分の前に立っていた煉のその背中が頼もしく見えたのを覚えている。

その時の彼は、その団体の親玉の息子だというだけでなく、どことなく迫力があつた。彼の言葉には従わざるを得ない、そう思わせるような圧迫感があつた。

煉の手前、密売人たちは一旦ひいたかのように思えた。

しかしそれは煉の手前でだけで。

隙をつかれた。

あとのことはよく覚えていない。ただ、必死だった。そんな密売人たちと契約するのは純粹に嫌だった。しかし誰かと契約しなければちからを発揮することはできないしその場を逃れることはできないと本能が咄嗟に判断したのか。

気づけば煉の手をとって。

気づけば彼の楽器となっていて。

気づけば大きすぎる自分自身のちからに飲み込まれて、暴走していた。

彼に惹かれる部分があつたのは確かである。魂と魂が引き合ったとでもいうかのような、陳腐ではあるがまさに運命

、としか名づけようのないような。

しかしいまだに自分を責めずにはられない。

どうして、煉と契約してしまったのか。

どうして煉を自分の奏者に選んでしまったのか。

『いい加減覚悟を決めろと言っているだろう、テルミン』

響くのはあの低い声。真っ白なだけの世界に色はなく。ただぼんやりと見渡しても相手の姿は見えない。声だけが聴こえる。

そもそも自分の身体すら見えない。

『お前は絶対に奏者を決めなくてはならない。“人柱”とするべき奏者を。あいつを認めないのならば、新しい奏者に早急に乗り換えるべきだ』

それはつまり、煉を殺すということ。楽器と人間の契約は、一度なされてしまえばどちらかが事切れるまで解除することはできない。

『まだ“人柱”にふさわしいかどうか判断がつきかねていると言うから、これだけ待ってやったんじゃないか。“彼女”も、俺も』

そうだ。そうやってずっと言い逃れてきた。

まだ煉のことを何も知らないから。まだ契約を交わしたばかりだから。まだ本当に“人柱”にふさわしいのかどうか判断できていないから。もう少し判断する時間が欲しい、と。

しかしもうそろそろその言い逃れは苦しい。

煉に与えられた道は二つだ。

“人柱”になるか。

契約破棄のために殺されるか。

どちらにせよひどい結末になることは避けられない。

後者ならばラズボルトが嬉々として徹底的に残酷な殺し方をするのは目に見えている。テルミンが煉に少なくとも単なるパートナーとして以上の好意を抱いているというのはラズボルトには明らかであるに違いないし、それは彼にとっはとてつもなく気に食わないことだから。

今のところはテルミンの奏者であり“人柱”となる可能性が捨てきれないから見逃してもらえていた。しかしテルミンが、やはり煉は“人柱”にはふさわしくないと宣言した途端に、煉の命運は決まってしまう。

しかし前者であっても苦しみや度合いは変わらない。いや、むしろ前者の方が人間の煉にとってはもっと苦しいことになるだろう。

ああ、どうしてぼくはあのとき煉と契約してしまったのだろう。

別の人間と契約していたなら。そしたら煉にこれほどひどい重荷を背負わせることはなかった。

ぼくが彼と契約さえしなければ、【宇宙の果ての歌】が奏でられるその時に、何が起きているのか事態を把握できず、何も分からないまま他の大多数の生き物たちと共にあつという間に突然すぎる死を苦しまず迎えられるはずだったのに。

『今更どんなに悔やんだところでもう遅い』

包まれる感覚。

いつものように恐れが意識中を駆けめぐるその感覚すらもう麻痺している。それほどにまでテルミンの意識は疲弊している。

『過去はどうあがいたって変えられない。全ては定められている。変えられるのは未来だけというが、その未来すらある程度決まっているのだ。無数にあるその選択肢のなかから、お前は選ばなくてはならない』

いつになく優しい声音で響くラズボルトの声。それに違和感を感じつつもテルミンは疑問に思うことすらもう諦めている。

まどろんでいく。

もう、全てどうでもいい。

意識が濁っていく。

だって悲しい結末は変えられない。どうあがいたってあのひとを、全ての罪なき生き物たちを闇の奥深く深くに突き

落とすことは避けられないのだ。

そしてその汚い仕事を請け負うのは、他でもない、自分。

何もかも勝手に滅びてしまえばいいのに。

こんな世界なんて、嫌いだ。

「煉。お前はやっぱり、【宇宙の果ての歌】を奏でたいの？」

唐突なこの問いかけに、煉は面食らったようだった。今までひたすらお互いに沈黙を貫いてただ何もせずに下界を見下ろしていただけだったから、こんな時に日頃は無口な楽器の少女が自分に話しかけてくるとはこれっぽっちも予想していなかったのだろう。

数度瞬きをして金色の瞳を見つめかえし。そして少し間を置いてようやく意味を飲み込んだのか、怪訝な表情を浮かべる。

「なんだ、急に」

「別に」

視線をふいと逸らしてテルミンはそっけない。

その会話の切り方は、もうこれ以上この話題に関しては何も言うなどでも言っているかのようで。

自分から切り出した話題であるというのにそれはあまりにも勝手な所業だ。

しかし煉は彼女をとがめることはしない。

今までもそうだった。

彼女がどれほど愚かなことをしようと、彼女のせいでどれほどひどい目にあおうとも、煉は一度もテルミンを責め立てたことはなかった。悲しみに沈んだ視線を送ることもなかった。憎むことなどももちろんなかった。

ただいつも無愛想なだけだった。いつもと変わらぬ態度をとり続けた。

どんなことがあっても、終わった次の瞬間にはまるで何事もなかったかのように平然としている。それが煉という男だった。

今まではそれを大して気に留めることもしなかった。しかしふと意識が向くと。その点が彼女のなかで疑問を提示し始める。その疑問は徐々に自身の存在を主張し始めて。大きく膨らんでいく。

「どうして煉はぼくを責めない」

自然に口からぼろりと言葉が零れ落ちた。

「どうして煉はぼくを拒絶しない」

広がる夜の世界に身をゆだねていたら何だか歯止めがきかなくなりそうだと頭のどこかでそんなことを思う。

夜は受け止めてくれはしないが、しかし否定することもしない。

ただぼくたちを包み込んでいるだけ。

そこには誰の意思も存在していない。何の感情も潜んではいない。ただ、静けさだけがある。

夜は嫌いだ。

ちっとも優しくない。

「お前は、俺に拒絶してほしいのか」

質問に質問で返す。テルミンが視線を上げると、煉と目が合った。彼は先ほどテルミンが唐突に言葉を発したときからずっと彼女の顔を見ていたのだろうか。

「何を恐れているんだ」

口をつぐんだまま答えられないでいるテルミンを気遣ってなのか。煉が言葉を続ける。

「いつも何を見ているんだ。何を聞いているんだ。何を考えているんだ」

口調はあくまで冷静。顔はいつもの無愛想。しかしその言葉にはどこか切実な響きが。

「お前自身は何を拒絶して、何を望んでいるんだ」

黒い瞳に見えたその色は何だ。

テルミンははっとした。

吐き出された質問の数々はもしかすると出会った頃から、煉が自分の内に溜め込んできていたものなのかもしれない。ずっとずっと抱えこんできて、しかし言わずに来たのか。

煉がぶつけてきた疑問がテルミンのなかにすっと入り込んでぐるぐるとめぐる。咄嗟には答えられない。

だって、分からない。考えたことがなかったから。

意識したことすらなかったから。全て未知のことで、全て今までの人生で考える必要などなかったことで。

テルミンには最初から全てが与えられていた。

最初から全てが完結していた。

ルールは既にしかれていて、彼女はそのうえをただ歩くだけでよかった。

自我というものを意識すれば、そのルールが不服に思えてくるであろうことは本能的に察知していた。

しかしそのルールからそれることはテルミンには許されない。

どうせその道しか与えられていないのだ。ならば、嫌な思いなどしたくはないではないか。

ならば、自我というものを意識しなければいい、それだけの話。

自分で考えるということをやめたのはずいぶんと早い頃からだ。それは今世からではなく、きっと、もうずいぶんと前の過去世から。

なのに、そう決意して自分で考え自分で選び取るということをやめたはずだったのに。ぼくは、ぼくは嫌だと思っていた。全てが嫌だと。

今だってそう。

夜は嫌いだと思っていた。

違うんだ。それは間違いなんだ。夜が嫌いなんじゃない。この世界が嫌いなんじゃない。

ぼくは、自分自身が嫌いで嫌いで好きで嫌いで仕方なかつただけだ。

ふっと正面を見ると、空中に浮いている蒼髪の少年の姿が目に入る。

非常に高い物見矢倉に煉と今まで二人でいたわけだが、ラズボルトはもちろん姿も気配も感じさせなかつただけで二人のことをずっと監視していたわけだ。

監視龍だから。彼は自分の職務に徹底している。

いっそラズボルトのようになれたらよかったのに。

蒼い髪を夜風になびかせながら、少年はにんまりとしたいやらしい笑みを浮かべている。しかし目はやはり冷たく笑ってはいない。テルミンにしか見えない少年。テルミンの監視役。

――さあ、ソイツを選ぶがいい

もう全て分かっているのだ。

――ソイツに楽譜を示せ。この世界の誰も知らないその曲を奏でさせろ。それが、お前の使命。

早くうなされている“彼女”をこの悪夢から目覚めさせてやるんだ。

テルミンのなかで何かがふっきれてしまった。

「煉――」

もう、逃げるのはやめだ。現実から目を逸らすのはやめだ。いつまでも逃げ続ける訳にはいかない。

それじゃいつまでたっても堂々巡り。状況はますます悪くなっていくだけ。

少しでも早く決断するべきだった。重い腰をあげるべきだった。しかし全て全て、今更後悔したところでもう遅いのだけれど。

全部「これから」にかかっている。

「……なんだ」

「ぼくはね、煉。この現実世界で、もっとも必要とされている存在なんだ」

テルミンはそう言って俯いた。煉は何も言うことができずに、ただ彼女を見つめている。

「そして、同時にもっとも疎まれるべき存在なんだ。誰よりも、何よりも。誰からも、何からも」

ぼくはこの現実世界を滅ぼすためだけに生まれたイキモノだから。

そこまで言ってからすっと顔を上げ、彼女はふっと微笑んだ。

自然に浮かんだその柔らかな笑顔。星の灯りに照らされたその笑みはおそらく、テルミンがテルミンとしてこの世界に生を受けてから初めて浮かべた笑みではなかろうか。

困惑しつつもその笑顔に煉は見惚れてしまう。儂く美しい笑みだった。それはどこか、そう、どこか近くて遠い笑顔

。

「ぼくと一緒に奏でてくれ、【宇宙の果ての歌】」

繰り返される毎日がいつまで続くかなんて分からない。

望むものは全て脆く儂い。少しでも綻びがあればすぐにぐらついて、あっという間にぼろぼろと崩れ去ってしまう。

志向するその先は果てしなく高い理想。

だから幾度となく絶望し、幾度となく拒絶することになるのだ。その理想に到底追いつかない現状を。

しかし志向することはちっとも悪いことではない。むしろそれは素晴らしいことだとぼくはちゃんと知っているのだ。

ぼくらは皆、貴女から生まれた。ぼくらは皆貴女の愛しい子どもたち。

もともとぼくらが生まれてきたのは全て、貴女の夢を貴女の望む幸せなものにするため。

そういう約束で皆皆肉体を譲りうけ、この地上に舞い降りる。

しかし大多数がこの地上に足を下ろした途端に全てを忘れてしまうのだ。

貴女の夢見る世界はとても目新しくいろいろなものにあふれていて刺激的なものも多い。

そういうものはたいてい貴女からすれば低俗。

本当を言えば貴女はきっとそれらを全てとり除きたい。

しかし何事も表を成り立たせるためには裏の存在が必要で。この理を曲げることはいくら偉大なる貴女といえどできないししてはならないこと。

下界であらゆるものに興味を移しているうちに、次第に汚れはたまってゆく。

そうして多くの者たちがますます約束を記憶の奥底にしまいこみ、思い出す可能性すら低めていってしまう。

自分の欲望には忠実だが周りをかんがみない。自らに素晴らしい機会を与えてくれた母に感謝の念すら忘れた自分のためだけに生きる。

自分自身のちからで生きていると思ひこむ。

そんな浅はかなぼくたち。

そして貴女は何度も傷ついた。何度も絶望した。

傷が深くなり夢が汚く澱んでいく。

その濁りがとても濾過できなくなると、貴女は全てを拒絶するしかなくなる。本当は貴女だってそんなことはしたくない。

でも全てを否定し、抹消するしかなくなってしまう。

だからぼくがいる。全てをやり直すために、その媒介として、ぼくが。

「ひとつだけ願いが叶うよ、煉」

意識を完全に共有した今、ぼくの記憶、考え、そして想い全てが煉に伝わっている。

ひも解かれる楽譜はもうずっとずっと永い間封じられていたもの。

今まで七度使われたというからぼくがこれを聴くのはきっと八回目なのだ。

なんだか、この楽譜のことをずっと嫌だと思っていたのにこうして今目の前にするととても愛おしい。これがずっと自分のなかに在って、ずっと自分とともにあらゆる時間を巡ってきたのだと思うとこみあげてくるものがある。

ぼくは今からこれを、煉と奏でるのだ。

「ふむ…… “人柱” となる時に願いがひとつだけ何でも叶う、と」

「そう。【宇宙の果ての歌】はとてつもなく莫大なエネルギーを放つから。その奏者ともなればどんな願いでもたやすく叶う。ただし、この宇宙を成り立たせている理から外れない範囲でならば」

「もしその理から外れたらどうなる？」

素朴な疑問なのだろうか。まあ確かに気になるところではあるのだろう。

「宇宙そのものである “彼女” を成り立たせている理から外れるということはすなわち宇宙である “彼女” との関わり自体を断つということ。ぼくたちは皆この世界に存する限り “彼女” に属するという根本的な事実は変わらない。理から外れればすなわちそれは本当の意味でのこの世界からの消滅だ。世界をリセットするだけでは済まない。煉の魂は永遠にこの世界に復帰することはできなくなる。…… “人柱” となっても、永遠に肉体をもってこの地上に再び降りるこ

とは叶わなくなるのだけれど、それだけに留まらない。魂として存在することすら不可能になる」

もっともそれはやはり不可能なのだ。

もともとぼくらは“彼女”の一部でしかない。

“彼女”から脱しようとするればそれは“彼女”にも影響が出てくるわけで……。

それを“彼女”が望むはずがないし、そもそも願いを叶えるこのエネルギーも“彼女”の管理下にあるのだから、承認を得たものしか通らない。自分の存在を崩壊させるなどいくら“彼女”でも許すはずがないだろう。

と、この一連の思考は煉には筒抜けであるはずなのだが、煉はただふむふむと頷いている。

そして煉の思考もぼくに筒抜けであるので、今彼が何を考えているかが手にとるようにわかるのであるが……。

「煉は理から外れた願いをするつもりなのか」

すると彼は悪戯っぽくにやりと笑った。

初めて見るその笑顔。容姿に反して意外と子供っぽい可愛らしさがあるのだな、などとなんだか感動してしまう。

「何でも試してみないと分からないだろう」

紡がれる旋律に見えないオーケストラが続々と加わっていく。流れ出すその音楽はそう、今この世界に生きる誰も聴いたことがないような深淵。宇宙の隅々にまで浸透していくその音なき流れは光よりも早く。意識すればその瞬間に目指す空間に到達している。

そして“彼女”が覚醒するのだ。

——おはよう、愛しい娘。

「おはよう、お母さん」

——おはよう、愛しい息子。

「おはよう」

気付けば既にぼくたちは“彼女”と対峙している。偉大なる“彼女”。全ての母でありぼくたちの世界そのもの。

——願いは決まっているようですね。

「ああ」

——その願いはどうやら私の理から外れるものであるらしいということを理解して上でそれを望むのですか。

「もちろん」

堂々と答える煉に躊躇いは微塵も見られない。圧倒的な存在を前にここまで「個」を保てる煉に対しテルミンは尊敬の念を抱かずにはいられない。

——息子よ。貴方は、私は何故目覚めることを望んだのか、もう理解しているはずなのですが。

「理解している。だが、俺にも譲れないものがある」

それに、と続ける煉の音がわずかに跳ねるのは高揚からか。

「何事も挑戦するっていうのは大事じゃないか？ 可能性は無限にある。試してみなければどうなるか分からない」

『俺は認めない』

不意に割り込んできたその声はラズボルトのものだ。唐突に何もないはずの空間に現れたのは蒼い龍。鋭く光るまなざしを向け、煉が願うのを阻止しようとしているのがはっきりと分かる。

『言ったよな、テルミン。“彼女”を裏切るな、と。裏切るというのならばいくらお前といえど俺は決して許さない』

自らこの手でお前を破壊してやる。言葉にしなくとも彼がそう言っているのがテルミンにははっきりと分かる。知らず震える意思。捨てたはずの恐怖がまた戻ってきたのだ。しかしそこで自分の意識に煉の意識が重なった。

——やめなさい、ラズボルト。

意外にもそんな彼を止めたのは“彼女”であった。これは相当予想外であつたらしく、ラズボルトが反駁する。

『何を言っているんだ。理に外れる願いなど叶えようものなら、貴女がどうなるか分からないというのに』

貴女だけに関わる問題ではない。貴女に何かあれば、貴女に属する全ての魂が影響を受けるのだぞ。

それはもっともな意見だった。

そうだ。全てに関わるのだ。

自分たちのわがままであらゆる魂を巻き込むことになる。

万が一良い方向に道を切り開くことができるというのなら構わないけれども、悪い方向にしか進めなくなる可能性の方が高いのは否めない。

ゆらぐ。どうするのが一番良いのか。

しかし“人柱”となるのは煉である。悲惨な運命を彼に与えてしまったのはほかならぬ自分だとテルミンはいまだに苦悶する。

せめて煉の意思を尊重したい。それは本心であった。

煉の様子をうかがう。彼はどう判断するのか。何を望むのか。

テルミンは驚嘆せずにはいられなかった。

互いに同期している今だからこそ分かることなのだが、煉の意思に揺らぎは少しも感じられなかったから。ただ単に無謀なのかそれとも何か確信のようなものがあるのか。

どちらにせよ、堂々と構えて“彼女”とラズボルトに対面している彼の意思の強さがテルミンには眩しい。

ずっとずっと、ただただ怯えてきただけの自分とは違う。煉は、強い。本当の意味で。

ここでテルミンは確信した。

たとえ過去をやり戻せたとしても、ぼくはやはり煉を自分の奏者として選ばずにはいられなかっただろう、と。

——ラズボルトの懸念も分かります。確かにこれは、煉とテルミン、そして私だけで済む話ではありませんから。私に何かあるということつまり、私の子どもたち全てに関係してくるということ。無益な困難は迎え入れるべきではありません。

それなら、と口を挟もうとしたラズボルトを制し“彼女”は続けた。

——無益な困難ならば、ね。

その一言にラズボルトは口をつぐむ。“彼女”に逆らうことは彼にはできないし、そもそもそれは彼の本意ではない

。“彼女”の含んだ物言いにぼくは途惑う。所詮ぼくのちっぽけな意識は“彼女”の一部から派生したものでしかなく。“彼女”の壮大な意思が考えるところのものはぼくの小さな世界にはとても収まりきらないしやすく受容できるものではないと思ったから。

困惑を隠せないぼくに向かって、彼女は温かく微笑みかけた。

——きっと私は待っていた。永い永い一瞬とも言える悠久のときの間、ずっと。全てを巻き込んで更にもう一段階、ステージを上げろとする強力な異端者が現れるのを……。

その異端者というのが、煉のことなのか。

「違う」

すぐさま否定した煉の声と重なって彼女がぼくを抱きしめるように包み込んだ感覚があった。

——貴女のことですよ、テルミン——

そして、願いは叶えられる——

人間と楽器という存在が生きていたというその世界は、もうこの次元の何処にも存在していない。

全知全能の圧倒的意識が隅々まで探しても、痕跡すら見当たらない。

つまり、そもそも最初から存在していなかったことになっているのだ。

その一人の人間の青年と、一人の楽器の少女が一体何を願ったというのか。それを知る者も、この次元には存在していない。

ことになっている。

静かな空間に、突然響き渡ったのはこの世に一步踏み出したばかりの小さな新参者の声。

まだろくに世界を認知することができず周りは全て未知のものにあふれていて不安で仕方がないのであろうか、それともただただ新たな環境に踏み込んだことに対する溢れんばかりの喜びを持って余しているのか、高らかに存在を主張し、周囲の意識を自分に向けさせようとしている。

小さな小さな拳を握りしめ、しかしまだまとったばかりの不自由な肉体の動かし方をよく理解していないらしく、ぎこちなく揺れている。

やがてそれは気づく。

自身に近づいてくる存在の気配に。

その気配の主の姿はいまだはっきりと認識することはできない。

しかし心の奥底で、それは感じている。その懐かしい感覚を。その温かい香りを。

気配の主は迷うことなくそれとの距離を縮めている。今か今かと待っているのは小さく儂い存在。

全てを変えた再会が果たされるのは、そう遠い未来ではない。

FIN